

慶應義塾大学医療系三学部合同特別実習
美濃地域診断実習
報告書

実習期間

2025年2月24日(月)～2月28日(木)

メンバー

薬学部3年 飯嶋聡美

薬学部5年 湯浅勘司

看護医療学部3年 山下心暖

看護医療学部3年 下林真璃奈

医学部2年 永田みのり

ファシリテーター

医学部5年 木下純一

目次

1. 事前準備.....	3
2. 実習のスケジュール.....	4
3. 美濃市での活動.....	4
3.1 街歩き.....	4
3.2 総合在宅医療クリニックみの 密山先生.....	4
3.3 美濃市地域プロジェクトマネージャー 大谷様.....	8
3.4 美濃ふたばこども園見学 近藤先生.....	10
3.5 地域福祉に関して 美濃市社会福祉協議会 地域福祉係長 介護福祉士 石神様 美濃市役所 民生部高齢福祉課 福永様.....	11
3.6 空き家バンク 森様.....	13
3.7 美濃市医療関係者の皆さま 美濃市役所 民生部部长 西部様 美濃市保健センター 所長様 美濃市保健センター 係長 保健師 柳瀬様.....	15
3.8 美濃保育園 理事長 雲山様.....	17
3.9 元美濃市保健センター所長 歯科衛生士 那須様.....	19
4. アクションプラン.....	20
4.1 アクションプランに至るまで.....	20
4.2 具体的なアクションプラン.....	20
5. 活動を振り返って.....	22
5.1 飯嶋聡美(薬学部3年).....	22
5.2 湯浅勘司(薬学部5年).....	23
5.3 山下心暖(看護医療学部3年).....	23
5.4 永田みのり(医学部2年).....	24
6. 発表資料.....	25
7. 謝辞.....	30

1. 事前準備

- 6/5(水) 初顔合わせ@zoom
- 6/15(土) 地域診断体験@zoom
- 6/17(月) 地域診断体験@zoom
- 7/4(木) 事前調べ学習の情報共有、今後の流れの確認@zoom
- 7/12(金) 調べ学習の情報共有とそれに基づくスライドの作成@zoom
- 7/15(月) 現地の方とのミーティング@zoom
- 8/4(日) 訪問候補地の確定@zoom
- 8/16(金) 各訪問地での質問項目の決定@zoom
- 8/26(月) 台風により実習の中止が決定
- 1/6(木) 8月までに実施したことの確認、実習に向けての流れの確認@zoom
- 2/6(木) 訪問候補地の決定、各訪問地での質問内容の決定@zoom
- 2/14(金) 現地でのスケジュールの確認@zoom
- 2/20(木) 現地での実習前最終ミーティング@zoom
- 2/24(月)～現地実習参加

2. 実習のスケジュール

	2/24(月)	2/25(火)	2/26(水)	2/27(木)
午前	美濃入り 長良川鉄道	・美濃市地域プロジェクトマネージャー 総合政策課 大谷さんより ・ふたばこども園	・空き家バンク&現地調査 ・在宅診療同行	モーニング キャニオンにて
お昼	うだつの上がる町歩き	道の駅へ	柳屋食堂	
午後	・美濃での在宅医療について 密山先生より	・地域づくりについて 社会福祉協議会 石神さん 高齢福祉課 福永さん	・健康文化交流センター ・美濃保育園 ・那須さん(元保健センター長)	美濃地域発表会
夜ご飯	山水	かがやきロッジ	初野屋	

GRAN BREW INN 美濃に宿泊

3. 美濃市での活動

3.1 街歩き

今回の地域診断実習で様々な方からお話を伺う前に、美濃地域を散策した。私たちが美濃地域で発見した都心との違いや新たな発見を紹介する。

- 店の前にあるランプ

ある飲食店の看板の上に、オレンジ色の大きなランプが設置されていた。夜になると明るく光っており、見慣れない私たちにとっては救急車のランプと勘違いするほどの明るさであった。美濃地域は車社会であるため、車に乗っていても店が営業しているか否かが分かるように、明るいランプを灯しているとのことであった。電車での移動が多い私たちには、衝撃的なものであった。

- 人の暖かさ

メンバーのうち4人はGRAN BREW INN 美濃に宿泊させていただいた。一日フィールドワークを行って宿に帰ると、管理人さんから、私たちへのメッセージが書かれたホワイトボードや入浴剤が置かれていた。宿対客ではなく、人対人という美濃地域ならではのつながりを体験させていただいたと感じる。美濃地域の人々の暖かさを知る出来事であった。

3.2 総合在宅医療クリニックみの 密山先生

【日時】

2月24日(月)17:00～18:00

【場所】

【内容】

- 美濃地域の現状について

質問「現在の美濃の在宅医療体制に関して、どう感じていますか。他のクリニック等の状況も含めた、全体像についてお聞きしたいです。」

「美濃地域」と言うときは、一般的に人口約19,000人の美濃市と、人口約70,000人の関市を合わせて約90,000人の規模で考えることが多い。

在宅療養支援診療所は、美濃市には少し取り組んでいる施設が4施設あるが、あまり取り組むことができていないという印象である。1カ所少し積極的に取り組んでいる施設がある。関市においても、あまり積極的に取り組んでいる施設はないと感じる。日本医師会による、地域医療情報システムJMAP (Japan Medical Analysis Platform) で事前学習した際に、美濃市は在宅療養支援診療所の施設数が多いという結果であったが、実際の状況は少し異なると分かった。密山先生の在宅医療は、医療機関に行くことができなくなった患者の家を訪問するという風に運営している。

質問「医療従事者の人数は充分だと感じますか。人手不足を感じますか。」

在宅体制にはあまり不足はないと感じている。患者が多すぎるといったことも特に感じない。今現在がちょうど良い状況である。美濃市立病院では、医師の確保に苦労しているという。大学の医局とは異なる方法で、他の岐阜市の病院と連携して人材を確保している。病院には在宅医療部門が存在する。内科の先生が病棟診療の合間に訪問診療を行っているが、10人未満の患者に対してのみ訪問を行っている。

密山先生のクリニックにおいては医師不足は感じない。採用は、紹介会社経由ではない。自ら希望して、クリニックの事業を面白いと感じて来る人が多い。

質問「医療を提供していくなかで、困難を感じていることはありますか。」

大病院の医師に、在宅医療のことを理解してもらうことが難しいと感じる。忙しい先生とコミュニケーションを取ることは困難である。病院の医師の先生が、退院カンファレンスに出席せず、医師同士のコミュニケーションが無いまま患者の引き継ぎを行うこともある。患者が退院して、家で療養することが当たり前では無かったことが原因である。医師同士のコミュニケーションに課題がある。これは地方に特徴的な問題ではなく、全国的なものだと感じる。総合診療の経験が豊富な医師が全国的に見ても少ないためである。サービスとして従来は存在しなかったものであるため、今後全国的にどうなるかは予想は困難である。訪問して行うことができる内容を説明していくことが必要である。例えば、患者の急変等に対して24時間対応すること、胃瘻の交換、腹水穿刺、点滴なども行うことができる。一つ一つ説明していくことが必要である。

在宅医療の需要は、年間65名程度の患者がいる。利益が出にくいから取り組まない人が少ないというわけではない。経験が少ないことにより、取り組むことに対して二の足を踏んでいる人が多いと考えられる。訪問診療は病院を退職した医師がやるものであるというイメージや雰囲気が残っているのではないかと。意識調査を行ってみるのも良いかもしれない。

岐阜県には、総合診療が根付いていない。学生が研修先を選ぼうとすると、引き留められる印象がある。最初は病院で研修した方が良いという雰囲気がある。

質問「住民にとっても、在宅診療はなじみのないものであったのではないですか。」

訪問看護師が最も需要を感じる職種であった。昔は訪問看護のみ行われていた。主治医は病院の先生で、17時以降は電話が通じなくなるという状況であった。現在は、退院調整を行う看護師が、密山先生の在宅クリニックの概要や利用方法を紹介してくれる。クリニックの利用方法が浸透していくと嬉しい。今は緩徐に浸透していくと良いと思っている。

質問「住民は、移動手段としてどのようなものを用いていますか。」

車一択である。街(うだつの町並み)の中なら徒歩で移動できる。訪問診療もほぼすべて車で行っている。1人で通院できない患者に対して在宅診療を行っている。気候に左右されることはほとんどない。降雪しても、街の中は大丈夫。雪は昼になったら溶ける。山間部はある程度積雪するが、現在特に困難は感じない。他地域、例えば飛騨高山の方は雪で移動が非常に困難となるので、オンラインなどの方法が必要となると思う。

※美濃市は屋根の角度が急ではなく、平らなものもあり、積雪は多くないと推察した。道路脇に凍結防止剤は設置されておらず、信号機も都市部と同じ横向きのものである。

- 他職種、機関との連携について

質問「市役所、行政機関と連携していると感じていることはありますか。」

コンパクトな街なので、連携しやすいと感じる。市役所との距離が近い。スタッフもそこまで多い人数ではないので、顔が見える関係性である。制度のことなど相談し合うことも多い。例えば、ALS重度訪問介護という、国が認定する制度において、1日の介護時間の限度を極限まで増やしてほしいという交渉を行った。岐阜県は全国トップレベルであり、ほぼ1日介護を行うことができるようになった。市役所の中にも、現状を分かっている人がいる。これ以降、難病の患者が使うことができる枠組みを作ることができた。これは、行政とともに制度を作り上げることができたという成果である。

質問「行政機関から、在宅医療の提供に関する要望を受けることはありますか。」

密山先生のクリニックの利用方法を、少しずつ皆さんが把握している感じである。美濃市に医師がいると安心だと患者は感じる。医師の先生は、岐阜市に住み、美濃市に通勤して

いる方が多い。この場合、夜間は美濃市に在中していないため、すぐに患者対応することができない。医師の先生がどこに住んでいるかも大事になってくる。今の状況が今後ずっと続くわけではない。オンライン診療などの今とは異なる形が必要となるだろう。1人の医師が支える形は望ましくない。最初から、十年後をイメージして医療を提供している。十年後の当たり前を今創る。

質問「地域の医療機関(病院、診療所、歯科医院、薬局)と連携していることはありますか。」

病院:連携室との電話ベース。中濃厚生病院、岐阜大学病院

診療所:病院と同じ。医師会(20~30人ほどでアットホームな雰囲気)の集まりへの参加。

歯科医院:美濃市、関市には歯科が比較的多い。摂食嚥下、誤嚥予防、嚥下機能評価は行っていない。歯科の往診は、すべての歯科が行っている。各患者にかかりつけの歯科がある。

メディカルケアステーションという、医療機関が患者情報を見たり、書き込んだりすることができる、掲示板のようなシステムがある。訪問カルテなどの閲覧ができる。急な場合は電話で、そうでない場合はメディカルケアステーションを用いる。美濃市と関市(中濃医療圏)の医療機関が閲覧可能である。

薬局:かつてはモルヒネ、点滴はどこにも置いていなかった。話し合いを行い、頻繁に使う薬のリストを共有した。薬局が在庫を抱えすぎないように、こまめに連絡をとっている。

質問「薬剤師と連携することはありますか。」

クリニックに薬剤師が必要かはまだ分からない。薬剤師業務のみ行う人材は必要ない。在宅管理と町の人々の健康を総合的に考えることができる人が理想である。

質問「施設在宅診療以外で、介護施設と連携していることがあれば教えてください。」

介護には関与していない。民間の施設は、企業理念が合わない場合もあり、ビジネスの関係になるので、連携が簡単ではない。市の施設に関してはサポートしたい。

- 美濃地域のこれからに関して

質問「クリニックを今後どういう施設にしていきたいですか。」

看護師が動きやすい施設にしたい。看護師が主役として活躍できる診療所にしたい。元々美濃地域にあった、看護師が主で動き、医師がサポートするといった形を残し、伸ばしたい。在宅看護と地域看護の二つを実践できて、医師のタスクシフトを行っていきたい。

質問「美濃地域は今後どうなっていくと思いますか。」

人口は減っていく。事業、イベント、新しい活動を先導できる人、こと創りできる人の人数を増やしていきたい。

質問「クリニックを今後も運営していくために、どうしたらよいと考えていますか。」

看護師が中心となること。看護師は地元の人が多い。医師は5～6年で場所を移す人もいる。マネジメントができる人と、そこに医師が数人いればよい。地域のケアをしながら。在宅診療で生計を立てる。

質問「後進の育成等で何か取り組んでいることがあれば教えてください。」

総合診療科に対して、岐阜大学の研修を受け入れている。「かがやき」には常に実習生や見学者がいる。中高生も受け入れている。

質問「密山先生は、美濃市出身というわけではありませんが、地元の人との壁を感じることはありましたか。」

元々美濃の人は商売人が多いので、そこを考慮してコミュニケーションを行っている。祭りに参加などした。地元の人は何を考えていて、どんなイベントを楽しみにしているのかといったことを知っておきたい。

美濃はコンパクトな街なので、一人一人の価値が高く、社会に与えるインパクトが大きい。看護師と一緒にローカルメディアのようなものをやりたい。看護師がなかなか地域に出ていくことが難しいので、記者のように、地元のいろいろなことを聞いてほしい。都会なら人数が必要だが、美濃なら少人数でもカバーできる。

- クリニックの活動について

支援ではなく共創。在宅医療、よろず相談、コトを創るひとの育成(社会教育)の三つが主な活動。誰かの作ったルールの中で働く人はいるけど、自分でルールを作る作り手の人たちが少ないと、街の賑わいが減る。何かプロジェクトを創ることができる人を養成する。

3.3 美濃市地域プロジェクトマネージャー 大谷様

【日時】

2月25日(火)9:00～10:00

【場所】

WASITA MINO 2階会議室

【内容】

- 美濃市について

質問「美濃市の魅力は何ですか。」

コンパクトさ、自然、伝統、人

特にメインと言えるものがないが、逆に目玉がないことが目玉である。また、行政が関与している訳ではないが、モーニング・カフェ文化によって自然とコミュニティが持続している。

質問「美濃市が抱える課題はありますか。」

半数が関市や岐阜市の都市部で働いているからこそまちづくりの文化が浸透していない。イベントなどの点での関わりだけでなく、そこから持続性のある面での関わりを増やすことで、地域でのつながりが深くなるのではないか。地域に住む人が地域への愛着や自己効力感を感じられるようにしていきたい。

質問「地域住民にとって美濃は暮らしやすい町ですか。」

都市から移住してきた人は美濃にあるもの、美濃市の特徴に目を向ける人が多いので、“住みやすい”と考える人が多いが、昔から美濃市にいる人は昔と比較して亡くなったものに目を向けがちなので、昔から住んでいる人の中には“住みにくい”と考える人が多い。市民が暮らしやすくなるように交通の面では地域交通の会社に市が委託することで“のり愛くん”などの制度を設けているが、待ち時間が長い、時間が読めないといったマイナスな意見も多く聞く。美濃市の中でも北部と南部で二極化しており、山間部に住む人々の環境が交通の面でも医療の面でもより過酷になっており住みづらさが増している。

- 市政について

質問「市役所が提供するサービスはどのようなものがありますか。」

旧態依然としたものが多くあるので、そこから削減していくことでアップデートできるのではないか。現在美濃市では、高齢者、子ども、産業、防災の四つの軸で美濃市第6次総合計画というものが進められている。この計画は時間軸が長く、連続性のある面の活動である。

質問「保育、教育はどのようなものですか。」

保育については、7つある保育園全てにおいて先生が素晴らしく、クレームも聞いたことがないほど素晴らしい。しかし、少し上の世代である中高生については、ふらっと集まれるような溜まり場が存在せず、健康文化交流センターのような場所もあるが、浸透してはいない。

質問「地域住民への情報発信はどのようなものを利用していますか。」

主に“広報みの”での情報発信を行っており、読了率は80%くらいとかなりの人が読んでいます。ラインでの情報発信も行っているが現在の登録者は4000人ほどとあまり多くはない。ホームページなども利用しており、3タップで必要な情報にたどり着けるような工夫もなされているが、媒体としての効果しかなく、伝達的な効果はない。

質問「市として感じている課題点や力を入れているところは何がありますか。」

美濃市では例年多くのイベントがあるが、その度に行政の職員の多くが駆り出され、手一杯になってしまうので、もっと民間に頼るべきなのではないか。また、行政ばかりが何かをするのではなく、挑戦したいという市民が発起してイベントを起こすことで、より地域のつながりが強くなるのではないか。

3.4 美濃ふたばこども園見学 近藤先生

【日時】

2月25日(火)10:30～11:15

【場所】

美濃ふたばこども園

【内容】

美濃ふたばこども園への訪問は事前に予定していなかったが、園長の近藤先生が私たちの訪問を快く受け入れてくださった。

- 園舎、園庭について

60年ほど前からある園舎と、2024年4月に増築した0～1歳児が過ごす園舎の2つを使って園児は過ごしている。園庭も広々としており、遊具や夏に使えるプールなどが設置されている。「園に来たからには楽しむことができるように」という考え方を大切にしているため、園舎の外壁はアンパンマンやディズニーキャラクターで埋め尽くされており、子どもたちが楽しく過ごせる環境を意識している。園庭にもキャラクターの置物が置かれていたり、塀にディズニーキャラクターの絵が描かれていたりして、とにかくカラフルな環境である。

園舎の内装も工夫している。外装同様、カラフルで様々なキャラクターに囲まれて園での生活を楽しむことができるのはもちろんだが、階段に描かれている数字やアルファベットで

学習することができたり、子どもの視線に鏡が設置されていたりと子どもたちの知的好奇心をくすぐるような園舎である。

- 保育園のシステムについて

園全体でICT化を進めている。例えば登降園管理についてはiPadで打刻できるように整備している。また園舎の中のすべての部屋にOK Googleが導入されており、先生がいなくても子どもたちがOK Googleに話しかけ、好きな曲を流すことができるようにという思いが込められている。園舎の入口にはテレビが設置されており、保育士が撮った園児の活動の写真をスライドショーで流している。活動写真は保護者の方へメールで送ったり、Instagramに掲載したりなど、様々な角度から閲覧できるよう工夫している。さらに午睡では、一人ひとりの児の胸の動きや寝返りの様子を機械が検知し、乳幼児突然死症候群を予防している。

- 子育て支援について

美濃ふたばこども園には園舎とは別に建物があり、そこでは園に入る前の子どもと親御さんが一緒に訪れることができる無料の場所を提供している。絵本やおもちゃだけでなく、大人向けの雑誌やお茶、お菓子も用意されているため、子どもが安全に遊ぶことができる場兼親御さんの居場所にもなっている。また曜日ごとに看護師や栄養士、エステティシャンなどもいるため、親御さんは育児相談だけでなくリラックスすることができる場としても利用可能である。ここでもやはり「来たからには楽しむことができるように」という思いから、単なる場所の解放だけでなく、子どもと親御さんどちらもが楽しむことができる場を目指して日々運営している。

- 多世代交流について

多世代交流をしている。一つは園児の生活発表会やお遊戯会を、地域の高齢者向けデイサービスで行っている。美濃地域は高齢化率が高いため、デイサービスを利用している高齢者も喜んで園児と接して下さる。二つ目は美濃地域の中学生や高校生が、ボランティアとして放課後や長期休暇の間に園児と遊んでいる。学生はボランティア活動ができること、園児は沢山遊ぶことができ嬉しいこと、園の先生は事務仕事に専念することができること、などみんなにとって良い環境づくりができている。保育士不足も問題となっているため、このようなボランティアを通して少しでも保育士の仕事に興味を持ってもらいたいという思いもある。

3.5 地域福祉に関して

美濃市社会福祉協議会 地域福祉係長 介護福祉士 石神様
美濃市役所 民生部高齢福祉課 福永様

【日時】

2月25日(火)13:30～15:00

【場所】

WASITA MINO 2階会議室

【内容】

石神さんは地域づくりに取り組んでいる。地域のために何かする足がかりとして、トンボ玉作りイベントを行った。19の方が参加した。まちづくりアンケートを実施した。

- 今後もこのようなワークショップがあれば参加したいか
- 生活していて困っていることは
- 美濃市にどんなものがあったらよいか
- 地域のために何かしたいと思っている人はいないか

を伺った。地域作りがしたいと言ってくれた方は数名おり、7名が名刺交換、名前の紹介を行った。

継続における課題、担当者の交替などの理由により、イベントを打ち出しても続かない。市民の声も、行政批判が多くなってしまふ。困っているという声をたくさんいただく。良いところ集めをやりたい。石神さんは、住民の困っていることは把握している。また、いろいろなことに取り組んでいる人も知っている。そこで、その間をつなぐ仕事がしたいと言っていた。美濃の人は、誰かに言われないとやらない、先頭に立つ人がいない、腰が重い人が多い印象である。表に出る人が少ないことが課題だと認識している。地域のオタク、おせっかいおじさんおばさんを探したい。

ワークショップを行うことで、様々な人が集まるのではないかと考えている。年四回ほど、行政の人、医療関係者を対象とした研修会を行っている。市民向けのイベントは、トンボ玉作りが初めてであった。地区の人も忙しく、負担が増えるという声もある。自主性のある地域作りをするというのが今後の課題である。地域作りは制限がなく、何をやっても良いからこそ難しい。ワークショップを提供するだけだと、生活支援から離れてしまふ。ある程度の線引きが必要である。

住民の困っていることとして、移動手段の声は大きい。実現できるような移動手段を整備すること、考えることが必要。行政が何をしているのかを知らない人が多い。広報みのと同様に、社協みの(社協作成の冊子)も住民に読まれていると感じる。市はLINEも運営している。登録者は4000人ほどで、行事、防災情報を配信している。社協は若者にもアプローチする必要がある。

石神さんは元々デイサービスや介護、ヘルパーをやっていた。昨年事務局に異動となり、地域づくりに携わるようになった。まだ勉強中だ。介護と同様に、人とつながることが楽しいと感じる。

福永さんは、最初は75歳以上の医療保険を担当し、現在は介護部門を担当している。市役所にこもりきりではなく、外に出て、いろんな人に会えるのが楽しい。顔見知りだった人とつながることができたというのがうれしい。法律相談などの相談を受けることが多い。

- 美濃市の現状について

介護は人手が足りない。ヘルパーがいない。需要は波があり、春が多く、冬は少ない。美濃市には8つほどデイサービスがある。市民との距離は、社協の方がまだ近く、市役所は少し遠い。

- 今後について

市役所の立場として、平等性が求められる。特定の誰かと親密になることは褒められたことではない。自治会に入りたくない、消防団がめんどくさいという声がある。今後時が経つにつれてつながりが弱くなっていくだろう。そうすると、自治が存続するか危うい。地方の傾向として、親は、自分のこどもには近所に住んでほしいと思う。都会が遠く、美濃市がよほど好きじゃないと戻ってこないと思う。車社会なので、運転ができないと生活できない。免許返納後の移動手段が大きな課題。

「よそ者」を嫌うのは、どこの地域でも同じことである。美濃市はうだつの町並みと和紙以外はあまり力を入れていない印象である。美濃の、他のことも知りたいという声もある。街のサイズがコンパクトであることが、強みでもあり弱みでもある。助けてほしい所だけ助けてほしい。知られたくないことは他人に知られたくない。でも、もっと深くまで踏み込んで助けてほしい人もいるかもしれない。どこまで住民の生活に踏み込んで良いのかの判断は難しい。焦らず、ゆっくりと活動していくことが大事である。

3.6 空き家バンク 森様

【日時】

2月26日(水)10:00～11:30

【場所】

NPO法人 美濃のすまいづくり

【内容】

- 空き家バンクの運営について

質問「空き家バンクの活動のきっかけや、活動概要を教えてください。」

美濃市は高い高齢化率や人口流出などにより空き家の数がかかなり多いという特徴があるが、その空き家を市役所だけでは運営しきれなくなったことが、活動始動のきっかけである。数多い空き家を何かしらの形で活かすことはできないかという声も上がり、運営を始めた。基本的に築50年以上の物件が多いが、古い物件ほど不動産屋さんに取り扱ってくれない現

実がある。不動産屋さんに断られてしまった所有者さんたちの、受け皿となるような活動をしたい。

NPO法人なので、利用者からお金は一切貰っていない。活動資金は市役所からの資金のみである。

このNPO法人は理事長、理事、会員、事務員で成り立っているが、実際の運営はほとんど事務員が行っている。基本的に空き家の所有者と入居者のマッチングを行うのが主な仕事である。実際の契約は当事者同士で行ってもらうため、不動産関係者や司法書士を紹介することもある。

質問「現在の課題はありますか。」

このサービスは、空き家の持ち主が該当の建物を“バンクに空き家として登録する”ことがないと始まらない。美濃には空き家が沢山あるのにもかかわらず、この空き家バンクに登録されていない空き家もある。現在は、需要が供給を上回っているのが現状である。“登録されていない空き家”をなるべく減らすために、この活動の周知活動に力を入れていかなければならないと感じている。

実際に行っている周知活動として、各家庭に送付される固定資産税通知書に、“空き家を放置しておくことのデメリット”を書いた紙を同封している。空き家の所有者に確実に紙が届くため、この方法をとっている。また読了率の高い“広報みの”の中でも空き家バンクのことを宣伝している。さらに“我が家の終活セミナー”というイベントを開催する予定である。“まだ空き家になっていないけれど、自分が死んで空き家になってしまった場合のことを考えないか”というセミナーである。美濃は高齢者も多いため、空き家バンクの活動を終活と絡めることで、自分事としてとらえる人が多くなるのではないかと狙いがある。

バンクに空き家として登録することは、空き家のある現地に足を運ばなくても、インターネットや電話だけで完結できることを知らない人が多いため、力を入れて周知活動をする必要がある。美濃市外に住んでいる人が、「他界した両親の家が美濃にあるが、美濃に行く時間が無い」と言って空き家を放置しているケースも少なくない。手続きは意外と簡単であることも周知し、登録数を増やしていかなければならないと感じている。

- 利用者・契約について

質問「空き家登録者と、入居希望者の平均年齢層はどのくらいですか。」

空き家登録者は60歳代以上が多い。自分が高齢になったため子ども一家と一緒に暮らすことになり美濃を離れるという方や、両親とも他界し空き家になり、自分は美濃市外に住んでいるという方が登録することが多い。

入居希望者は40歳代が多いが、様々な年齢層にわたる。定年後に美濃でゆつくりと暮らしたいと希望される60歳代以上の方もいれば、自然豊かな美濃で子育てをしたいと希望される家族連れもいる。

質問「どの地域からの移住が多いのですか。また美濃の何が魅力と感じ、移住するのでしょうか。」

愛知県や岐阜県内の都市部からの移住者が多い。美濃で賃貸物件を借りていた人が、空き家バンクを利用して空き家を購入するというケースもある。その他、静岡県、兵庫県などからの移住もある。

美濃は高速のインターチェンジが近くにあるため、名古屋市まで車で1時間程度で行くことができる。通勤可能圏内と考え、自分がしている仕事を維持したうえで、美濃での田舎暮らしを実現したいという人もいる。また長良川や板取川などの自然に惹かれて来る人もいれば、山間部だけれど雪が比較的少ないところを魅力に感じて来る人もいる。

質問「実際年間どのくらいの契約が成立しているのですか。」

2024年度は多く、約200人から問い合わせがあった内18件成立した。2023年度は9件成立した。平均年間10件前後成立することが多い。

- 美濃について

質問「この活動を通して、美濃がどのようなまちになってほしいと思っていますか。」

空き家バンクは美濃の特徴を活かした活動であるため、無くならないで欲しいと思っている。市として若い世代が圧倒的に減っているため、空き家バンクを通じた移住など、地域活性化につなげていきたいと考えている。

3.7 美濃市医療関係者の皆さま

美濃市役所 民生部部長 西部様

美濃市保健センター 所長様

美濃市保健センター 係長 保健師 柳瀬様

【日時】

2月26日(水)14:00～15:00

【場所】

美濃市健康文化交流センター2階検診室

【内容】

- 健康文化交流センターについて

質問「どのような人が利用されていますか。」

勤労者青年ホーム、児童センター、老人福祉センターの老朽化に伴い、集約し、保健センターも一緒に入る形となって、数年前にできた建物である。乳幼児から高齢者まで利用できる施設を目指している。他にも、ホール、こどもが遊べるスペース、体操ができるスペース、料理できるスペースなどがあり、料理教室、ひな祭りなど幅広くイベントを行っている。交流広場としてのスペースである。高齢者の人にもう少し来てほしい。観光客を意識して、駐車料金を設定したこと、銭湯が無くなったことが懸念点である。

質問「中高生の利用者はいますか。」

中学生は夕方を中心に集まっている。体感では1日20～30人程度である。幼児から高校生までが集まる場所であるので、利点もあればトラブルもある。親御さんも一緒に集まることができる。美濃市には他にグラウンドがあり、公民館や体育館もある。

- 医療について

質問「現在の美濃市の医療をどのように評価していますか。」

美濃市は元々七つの地区が合併してできた市である。今でもその名残はある。医療機関は八つある。市立の美濃病院が一つ、他は民間の診療所である。高齢化に伴う後継者不足の課題がある。

質問「統計資料を見ると、美濃市は在宅医療が充実しているように見えるが、実際はどう感じますか。」

数字は多いかもしれないが、実際は取り組めていない施設が多い。

質問「医師を中心とした医療従事者不足を感じることはありますか。」

美濃病院から聞いた話では、離職が多い。そのカバーが大変だ。人手が足りないため、岐阜大学から若い医師に来てもらって人員を確保しているが、それでも足りない。医療圏内の三つの病院で協定を組んで、医師を確保できるような工夫をしている。後継者不足、医師の高齢化等により診療所が無くなっていくことを不安に感じる人もいるだろう。

質問「医師会、薬剤師会との連携や、協議を行う機会はありますか。」

健康作り推進協議会を行っている。歯科医師会とともに、口腔保健の協議会を行っている。薬剤師会は三業フェア等で協力している。保健師のブースも設置している。前回はがん検診の啓発活動を行った。

質問「他地域との連携で行っていることがあれば教えてください。」

隣の関市、武儀医師会と連携している。関市との連携は、医療のみならず、ゴミ処理、消防などで運営をともにしている。また、岐阜大学との連携協定を結んでいる。民生部では、環境問題に対する取り組みとして、ゼロカーボンを目指す協議会を令和四年度に立ち上げ、大学の教授に来てもらって、取り組んでいる。岐阜大学医学部を目指す学生に対して、返済のいらぬ奨学金を数人に提供している。

それぞれの市に合わせた医療体制や助成の方法がある。時が経てばやり方も状況も変わる。それに合わせて健康の維持管理も考えていく必要がある。

保健センターは医療ではなく予防に取り組んでいる。検診受診率向上への働きかけ等を行っている。保健センターや保健師が何をしているのか知られていない。地域に出て行って、啓蒙運動をしていきたい。おせっかいおばさんがいるところと思ってほしい。

3.8 美濃保育園 理事長 雲山様

【日時】

2月26日(水)15:00～16:30

【場所】

美濃保育園

【内容】

- 木育について

質問「子どもたちに対してどのような木育を実施していますか。」

生活に密着した、かつ発達や年齢に応じた木育を実施している。例えば、年少は木のお家を作成したりしている。また、はこいすやスプーンなども作成している。こうした身近に使うものを作成することによってメンテナンスも行いやすくなっている。はこいすは子どもたちが成長しても使う向きを変更することで長く使えるように工夫されており、いすとしてだけでなく、給食を食べる際の机としても使用している。こうした木育に使用する木は、年齢に合わせて削りやすさの異なる材質のものを使用し、多くの種類の木に触れることができるようになっている。

また、日々、プラスチック製品や多くのキャラクターに囲まれて過ごされているからこそ、美濃保育園では多くの製品の材質が木である他、ほぼキャラクターの装飾をしていない。

質問「建物の特徴はどんなところでしょうか。」

木育の一環として12年前に建てた建物もある。“光と風を入れる”というようにこの地域の自然を活用しながら建物を建てており、大きな窓から光が入り、高台に建っているため風が通るように設計されている。暑さが増してきた去年以前はエアコンを設置しておらず、自然の恵みによって夏は涼しく、冬はあたたかさを感じることができる建物になっている。

場所によってメインで使用している木材の材質は異なっており、例えば杉が床一面に使用されている部屋もある。杉はやわらかいため、子供たちが転んでもあまり痛くない。また、湿度に大きく影響され、冬は木が縮むため、床板を増やすようにしている。

広葉樹の間が存在し、この部屋は広葉樹から作られている。また、広葉樹の葉のデザインも合わせて配置している。また、部屋の壁や床には美濃和紙を使っている部分がある。

建物の外には階段や傾斜などがある部分もあるが、適度にリハビリや子供たちの発達に応じて使うことができるようになっている。

- 美濃保育園での生活について

質問「子どもたちはどのように通園していますか。」

車が多い。去年まで送迎バスを運行していたが、町の中にいる子どもの数が減少していることもあり、今年度から運行を中止した。

- 地域の人との関わりについて

質問「こどもたちが地域の人と関わる場面はありますか？」

月に1度、どんぐりカフェというカフェを実施している。親御さんや地域の方を招き、年長さんが彼らの接客などを行う。この地域には独居の方が多いため、子供たちなどに関わる機会があることでつながりが保たれるのではないかと考えている。また、木育に関しては森林文化アカデミーの卒業生や地域の方と協力して何か作成するといったことも多い。

- 保育園留学について

質問「保育園留学は子どもたちや職員の方にどのような影響を与えましたか。」

例えば、外国人の方が保育園留学の一環として園を利用することがあるが、その際、子どもたちは相手の言語を話せないながらも会話を試みる。こうしたふれあいがあることで、今後外国人の人を拒絶するといったことがなくなると考えている。

職員にとって保育園留学はチャレンジだった。一時預かりのお子さんを受け入れたことはあったものの、子どもの人数が増えることによる業務の増加の問題もある。しかし、地域の方がこの制度に協力的であり、もともと園に子どもを通わせている親御さんからの理解もあることから、上記のような様々な価値を生み出すことができていると感じている。それは時に目に見えない価値で金銭的なメリットはないが、親御さんには子どもをどう育てたいのか？というところにも注目してほしいと思っている。

3.9 元美濃市保健センター所長 歯科衛生士 那須様

- 美濃の医療・保健制度の特色について

質問「美濃の医療や保健制度には、他の地域と比べてどのような特徴がありますか。」

美濃市では過去、3歳の虫歯が多かった。今から35年前は、歯磨きの習慣がなく、寝る前に歯を磨くといいた知識がなかった。しかし、教育面でのアプローチなどにより、現在は岐阜市と同じくらいの水準にすることができた。虫歯率が高かった原因としては、美濃市には3世代家族が多く甘いものを子供に与えがちだったこと、保育園でも甘いものが多く子供に提供されていたことなどが挙げられる。現在は保健師や他の人々とチームになってそういった課題に取り組んでおり、歯だけでなく体全体の健康について考えられる取り組みをすることができるようになってきていると感じる。

教育面のアプローチに関しては、子どもたちに対して歯磨きの授業などを行っている。授業は美濃市の小学校中学校で行っていたが、コロナの影響でできなくなってしまい、虫歯が増加したこともあった。3年ほど前からマニュアルやパワーポイントの資料を作成し、誰が指導しても同じような結果が得られるようにしている。

質問「保健・医療に関する美濃の強みと弱みはどのような部分ですか。」

美濃ならではの強みは、地域がコンパクトな部分だと感じている。コンパクトだからこそ人と人との繋がりが強く、学校の数も多くないからこそ全ての学校を回って指導を行うこともできる。一方で、がん検診の受診率の低さや糖尿病患者の多さが課題だと感じている。保健センターとしては重症化予防に力を入れたいと考えている。

- 美濃での暮らしに関して

質問「住民の方からニーズが高いと感じる分野はありますか。」

運動面に興味が高いと感じている。美濃市は車がないと運動ができる場所に行くことができない。また、働く世代ができる運動場所が少ない。住民の声を検診の場で直接聞くこともあるため、健康面でニーズを聞いて新しい取り組みをできればと考えている。

質問「少子高齢化が進んでいることによるニーズの変化はありますか。」

まずは高齢者に関しては、移動手段や買い物支援の声が高まっている。ゴミ出しができない人もおり、どうすれば良いかとの声が上がっている。また、草むしりをやって欲しいとの声や電球を変えてほしいなど、日常の小さな困りごとに関するニーズが高まっている。

次に子供に関しては、四季折々の事業に合わせて子供むけのイベントを行っている。課題として、図書館が遠く高校生くらいの人が勉強する場がないこと、小学生がのびのび遊ぶことができる場所がないことなどがある。

質問「美濃が将来どのような町になってほしいですか。」

美濃で生まれて住んで生活して、安心して生活できる様な資源ができてほしいと感じている。美濃は特に交通の面では不便だが住みやすいまち。人が優しいから安心して住むことができる。一度は美濃を出て行った人も戻ってきてくれたらいいなと思っている。

4. アクションプラン

4.1 アクションプランに至るまで

以上のフィールドワークを通じ、我々は「コンパクトで人と人の距離が近い」という部分に美濃の魅力を見出した。一方で、住民の方へのヒアリングにより、距離が近すぎる故に何かのプロジェクトを先導する人が少ないというお話を伺った。そこで、距離の近さゆえの課題を解決しながら、美濃の良さを生かすことができるアクションプランを考え、提案した。具体的な内容は以下のとおりである。

4.2 具体的なアクションプラン

我々が提案したアクションプランは、“好きと好きをつなげるしくみ”を作ろう！というものである。大まかに、匿名で好きなもの、得意なこと、困っていることを募集し、その回答を集めてマッチングした後、ニーズに合わせて人と人をつなげたりイベントを開催するという流れで進んでいく。以下、詳細を述べる。

まず、一段階目では、匿名で“好き・得意・困っていること”などを募集する。匿名にした理由は、住民の方から人と人の距離が近すぎて何かを言い出しづらいこともあるというお話を聞き、匿名で、気軽に安心して、好きなこと・得意なこと・困っていることなどを書き込める場が

あればいいのではないかと考えたからである。具体的な募集の仕方として、「広報みの」を活用した方法を提示した。「広報みの」は、すべての世帯にポスティングされており、8割の人が読んでいるという。こうして地域に既にある情報発信に自分の好きなことなどを書き込める欄を作り、切り取って回収できるようにするという案を考えた。また、紙媒体だけでなくGoogleフォームも作成し、SNSに慣れている若い世代からはQRコードから回答してもらえるようにするという案も考えた。

第二段階では、第一段階で回収したみなさんの“好き”や“困りごと”をつなげていく。「あまり言ったことないけど実は〇〇が好き!」、「昔こんなことしてたんだ〜」、「小さいことかもしれないけど、これ困ってるんだよね」、「こんなことしてみたいんだけど〇〇得意な人いない?」といった声を集計することで、地域住民の新たな“好き・得意”を発掘することができるほか、地域の中で助け合いをすることができるようになるかもしれない。

最後に、第三段階目では、ニーズに合わせた会の開催を行う。例えば、裁縫が好きな人が多いのであれば、みんなで裁縫をしよう!というイベントを開催することで新たに趣味を通じて社会的なつながりを確保することができると思った。また、体力に自信ある若者と草むしりできず困っている高齢者がいたとすれば、若者が高齢者宅の草むしりをする、といった形で地域内で困りごとを解決することができる。こうした会の開催は、コンパクトで人との距離が近い美濃だからこそすぐに実践することができるのではないかと考えた。

実際に作成した広報誌の一面とGoogleフォームは以下のとおりである。

美濃に住む皆さまが、気軽に聞えることができる場所が少ないという意見が聞かれています。そこで美濃市に住む皆様の好きなこと、得意なこと、困っていることなどを募集し、様々な方が交流することができる場所を作りたいと考えています!

「あまり言ったことないけど実は〇〇が好き!」
「昔こんなことしてたんだ〜」
「こんなことしてみたいんだけど〇〇得意な人いない?」
「小さいことかもしれないけど、これ困ってるんだよね」
など、どんなことでもかまいません!!ぜひみなさんのことを教えてください!よろしくお願ひいたします!

☎-----※!!-------☎

・好きなこと、趣味

・得意なこと

・困っていること

・活動へ参加したい方や講師などのご協力いただける方は、お名前とご連絡先をお願いします

QRコードからもお答えいただけます!

美濃市アンケート

美濃市に住む皆様の好きなこと、得意なこと、困っていることを教えてください！

Google にログインすると作業内容を保存できます。 [詳細](#)

好きなこと・趣味

回答を入力

得意なこと

回答を入力

困っていること

回答を入力

マッチングを希望する方はお名前とご連絡先をお願いいたします

回答を入力

送信

[フォームをクリア](#)

5. 活動を振り返って

5.1 飯嶋聡美(薬学部3年)

私は、今回の活動で、初めて地域診断というものに触れた。初めは、一体何をするのか、どのようなアクションプランを立てれば正解なのか全くわからなかった。しかし、実習前の調べ学習や実際の実習を通して、地域診断とは特に”コレ”といった正解があるものではないのだと理解できた。実際に現地の人々から話を伺うことで、その人たちの仕事上の立場や生活環境、これまで育ってきた軌跡などによって例え同じ場所に住んでいたとしても見えているものや考えていることが全く異なることがわかった。今回の実習で建てられたアクションプランは質問して得られたさまざまな人の要望やマイナスからプラスのものまである意見を踏まえて、より多くの人の意見を反映するものを作成できたのではないかと考えている。

5.2 湯浅勘司(薬学部5年)

私は、今回の参加メンバーで唯一の地方出身者であった。私の地元である岡山県真庭市は、美濃市より人口は多いものの、山間部で医師不足、市街地は遠く、車移動が基本であるという点で、美濃市と似通っている。事前準備と現地を訪れた四日間、頭の中で地元と美濃市を時には比べながら、美濃市の現状を把握することができた。地元と共通しているところは、場所が変わっても地方はこうなのだな、と思い、地元と異なるところは新たな学びとなった。

インタビューを行い様々な職種、立場の人から話を伺うなかで、「美濃にずっといる人は、美濃の悪いところばかり目につき、外から移住してきた人は、美濃の良いところばかり目に写る」という話がとても心に残った。きっとこの文は、「美濃」を違う地域の名前に変えても成り立つものだ。地域診断に限らずとも、今回のような地元や地元でない場所の良さをどんどん発見していくという営みが、社会全体を活発にしていけることを切に願う。

5.3 山下心暖(看護医療学部3年)

私は以前訪問診療に同行させていただき、地域に目を向けた医療の魅力をより知りたいと考えていたため美濃地域診断実習に参加した。当初は医療系三学部での実習であるということからも、“美濃地域における医療体制はどのようなものか。どのような疾患が多いのか”という医療の側面から美濃地域を見て、“美濃に住む人々が健康に住み続けるにはどうしたらよいのか”という疑問を解決しようとしていた。しかし実際にフィールドワークを行い様々な職種の方とお会いすると、職業としてはもちろんだが、美濃の住民という立場からの意見も伺うことができた。つまり医療だけでなく、日常生活の話、子育ての話、美濃まつりの話など、様々な側面から地域の人々が美濃をどのように思っているのかを知ることができた。

美濃に住む人々の思いを聞き、健康という言葉の幅広さを再認識した。身体的、精神的、社会的な健康という大まかな分類だけでなく、住民一人ひとりが思い描く細かな分類の“健康”が存在していると感じたからだ。私たち医療者は、健康＝身体的に良好な状態と考えがちであるが、より広い視点を持つことが、地域を知る第一歩になるのではないかと考える。これは美濃だけでなく他の地域でも通じると思う。今回の学びを忘れずに、患者さんだけでなくその人の住む地域にも目を向けた看護をしていきたい。

5.4 永田みのり(医学部2年)

私は今回、医療の生物学的な側面だけでなく、社会的・地域的な側面についても学びを深めたいと思い、この実習に参加した。実習を通して、これまで自分の中に当たり前のようにあった考え方が大きく揺さぶられる体験を何度もした。

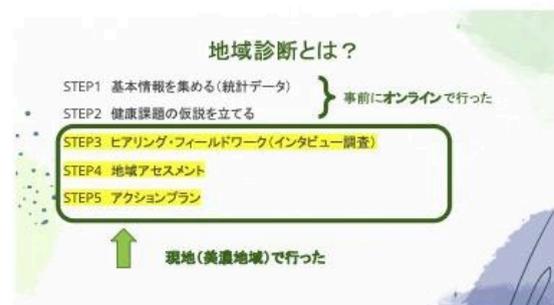
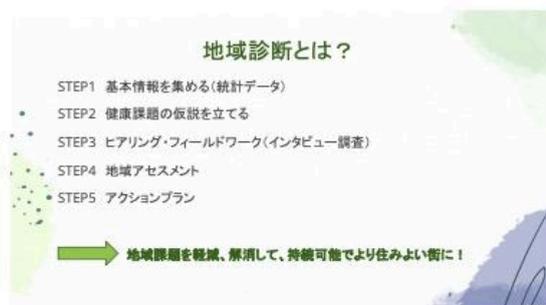
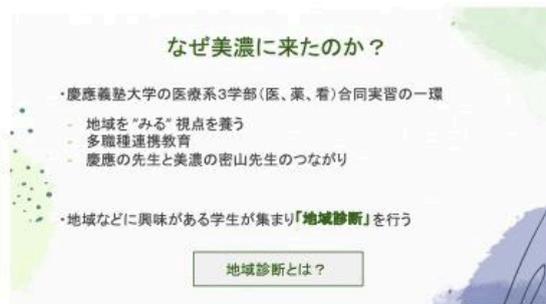
まず、医療の面では、病院が町の中にあること、医療者が町の一員であること、という、都市部ではあまり意識することのない事実を強く実感した。特に美濃の在宅医療クリニックで

は、医療の提供にとどまらず、「コトを創る人」の育成など、社会教育やまちづくりにも積極的に関わっていた。こうした、地域と深く関わりながら展開される医療の姿に触れ、医療のあり方は一様ではなく、地域ごとに多様な形があることに気づかされた。

また、地域での暮らしについても印象的な学びがあった。実習中、住民の方がおっしゃっていた「不便だけど暮らしやすい」という言葉が特に心に残っている。私はこれまで、交通や商業施設が充実している場所こそが“暮らしやすい”と考えていた。しかし実際に美濃での5日間を過ごす中で、すれ違う人が自然に挨拶をしてくださったり、気さくに声をかけてくださったりすることで、人と人とのつながりのあたたかさを肌で感じ、それこそが暮らしやすさにつながる要素の一つだと気づいた。

今回の実習を通して、医療も暮らしも、数字や効率だけでは測れない目に見えない大切な要素や価値があることを実感した。地域に根ざした医療や、人とのつながりのあたたかさに触れた経験を、今後の学びや将来の進路選択にも活かしていきたい。

6. 発表資料



事前学習してきたこと

- 色々な側面から美濃について調べ学習
 - 医療、教育、人口動態、経済など
- 我々の仮説:
「美濃は全ての人にとって暮らしやすいまちなのではないか？」

➡ 現地実習のフィールドワークを通じて、この仮説を検証します！

04

フィールドワークで学んだこと

スケジュール (2/24~2/27)

	2/24(水)	2/25(木)	2/26(金)	2/27(土)
午前	乗車入り 昼食・お昼寝	美濃市地域プロジェクトマネージャー 大谷一夫さんより ～お昼ごはんを頂戴～	① 美濃市福祉課 地域福祉課 ② 美濃市健康課	③ 美濃市福祉課 ④ 美濃市健康課
午後	① 美濃市福祉課 地域福祉課 ② 美濃市健康課	③ 美濃市健康課 ④ 美濃市福祉課	⑤ 美濃市健康課 ⑥ 美濃市福祉課	⑦ 美濃市健康課 ⑧ 美濃市福祉課
夜	美濃市健康課 美濃市福祉課	美濃市健康課 美濃市福祉課	美濃市健康課 美濃市福祉課	美濃市健康課 美濃市福祉課

フィールドワークで学んだこと

医療

行政/福祉

子育て

街歩き

医療

【総合在宅医療クリニックの 曹山先生】

- 支援ではなく共創
- 患者情報を掲示板のように共有
- 在宅患者ノートで、多職種が患者の体調を一括で見ることができる

行政/福祉

【美濃市地域プロジェクトマネージャー 大谷一夫さん】

- 点ではなく面で地域の良さを感じてもらいたい
- 地域に住む人が地域への愛着や自己効力感を感じる
- 人口は減少していても、地域の関係人口を増やしていければ良い
- Well-beingで街を目指そう
- “一人一人が挑戦 夢叶える街”
- 美濃の比較軸が昔になってしまい、マイナス思考になりがち

行政/福祉

【社会福祉協議会】

- とんぼづくりができる
地域づくりのイベントを開催
19人が集まって交流
- 得られた課題
- 何かイベントをやっても、その次に繋げることが難しい
- 継続していくためにはどうしたら良いのか？

行政/福祉

【民生部部長、保健センター所長、保健師の方】

- 健康文化交流センターでは、子供連れのお母さん、小中高生が遊び、勉強など集まっている(多世代交流の場)
- のり愛くん高齢者の移動をカバー
- 2歳以下の保育料 無償化へ(働く世代応援)
- 医療機関減少への不安感
- 地域へ出ていって、「お節介お婆さんの様な存在になりたい」

行政/福祉

【歯科衛生士/元保健センター長 那須智子さん】

- 強み:コンパクトさ→全ての小学校を回るができる
- "不便だけど暮らしやすい"



便利さ





くらしやすさ

行政/福祉

【空き家バンク 巖さん】

- 空き家はあるのに登録されない
- 今年度は約200人から問い合わせあり
- 需要が供給を上回っている
- 美濃が無くなりたいではない



子育て

【美濃ふたばこども園】カラフルで親しみやすい環境、ICTの導入、入園前の子育て支援



・カラフルな園舎
・アンパンマンやディズニーのキャラクターが沢山いる



・ICTの導入
・iPadやOKGoogleの設置



・入園前の子育て支援
・子ども大人も楽しめる場所

子育て

【美濃保育園】木育、保育園留学、地域との関わり



・美濃の自然を活かした建物
・生活に密着した木育



・保育園留学
・"子どもをどう育てたいか?"



・どんぐりカフェ
・地域の方とのつながり

街歩きをして気が付いたこと



・店の前のランプ
・車社会



・人とのつながり
・あたたかい！嬉しい！

美濃に住む人々の声

- コンパクトな地域
 - (+)近所の人とのつながりがある
 - (-)市役所がどんなサービスを提供しているか知らない
- 美濃まつりがある
 - (+)四季を感じられる、住民同士の仲が深まる
 - (-)市役所の方が準備に追われる、各家庭の内職が負担
- 子どもにとって
 - (+)自然が豊かで、コンパクトなので知っている友達が多い
 - (-)公園や児童館はあるが、遊ぶ内容が限られている
- のり愛くんについて
 - (+)免許を返納した高齢者の足になる！
 - (-)待ち時間が長い、

特に印象に残ったこと

【美濃のいいところ！】

コンパクト！

人と人との距離が近い！

【一方で...】 "距離が近すぎて先導者が少ない"

↓

より地域への愛着を感じながら過ごせる住みやすい町にするにはどうしたらいいか？

05

アクションプラン

私たちが考えたアクションプラン

“好きと好きをつなげるしくみ”

【大まかな流れ】

①匿名で好き・得意・困っていることを募集

②回収・つなげる

③ニーズに合わせた会の開催

①匿名で“好き・得意・困っていること”などを募集

- ・人との距離が近すぎて何かを言い出しづらいこともある
- ・匿名で、気軽に安心して、好きなこと・得意なこと・困っていることなどを書き込める場があればいいのでは？

〈例えば...〉

- ・すべての世帯にポストイング、8割の人が読んでいる「広報みの」に書き込める欄を作る→切り取って回収
- ・フォームにQRコードから回答できるようにする

②つなげる

- 結果を集計してみる
- ・「あまり言ったことないけど実は○○が好き！」
- ・「昔こんなことしてたんだ〜」
- ・「小さいことかもしれないけど、これ困ってるんだよね」
- ・「こんなことしてみたいんだけど○○得意な人いない？」

好きの発掘

地域の中で助け合えるかも！

③ニーズに合わせた会の開催

- ・〈例①〉裁縫が好きな人がたくさん！
→みんなで裁縫をしよう！というイベントを開催！
- ・〈例②〉「体力に自信ある！」×「草むしりできず困っている」
→草むしりをする！困っていることの解決

コンパクトで人との距離が近い美濃だからこそ
すぐ実践することができるのでは！

7. 謝辞

本実習を行うにあたり、大変多くの方にご支援いただきました。皆様のおかげで、実りある実習を行うことができました。以下の方々に心より深く感謝申し上げます。

密山要用 先生 総合在宅医療クリニックみの 院長

大谷一夫 様 美濃市地域プロジェクトマネージャー

近藤潮純 様 ふたばこども園 園長

石神智子 様 美濃市社会福祉協議会 地域福祉係長・介護福祉士

福永 様 美濃市役所 民生部高齢福祉課

かがやきロッジの皆さま

那須智子 様 元保健センター所長 歯科衛生士

森朋美 様 空き家バンク職員

西部 様 美濃市役所 民生部部長

美濃市保健センター 所長様

雲山晃成 様 美濃保育園 理事長

柳瀬理 様 保健センター 係長(保健師)

GRAN BREW INN 美濃 管理人様

美濃地域の皆様

(順不同)